

# 私立大学研究ブランディング事業

## 2017（平成29）年度の進捗状況

学校法人番号	131097	学校法人名	立正大学学園		
大学名	立正大学				
事業名	立正大学ウズベキスタン学術交流プロジェクト				
申請タイプ	タイプB	支援期間	3年	収容定員	9420人
参画組織	立正大学ウズベキスタン学術調査隊、仏教学部、文学部、地球環境科学部、法華経文化研究所、研究推進・地域連携センター				
事業概要	<p>本事業は、本学の特色を生かした学際的領域の研究事業である。ウズベキスタン研究機関との学術協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教遺跡の発掘、保存修復、科学分析を行い、日本への仏教展開過程を明らかにする。そして2015年に発表した共同声明の内容を深化すべく、当地での発見を内外に公表し、研究事業への展開や教育交流など、学術・教育両面での成果を還元することを目指す。</p>				
①事業目的	<p>本事業は、ウズベキスタン共和国科学アカデミー等との協定に基づき、現地研究者と共同で当地に残る古代仏教伽藍址の発掘、保存修復、出土物の整理調査および科学的分析を行い、ユーラシア大陸における仏教文化の展開過程の一端を明らかにすることを主目的としている。また立正大学は日蓮宗の僧侶の教育機関を淵源としており、日蓮の社会貢献への誓いを現代的に言い換えた「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与しよう」という立正精神を「建学の精神」としている。しかし、現状では本学の独自性や建学の精神について広く認知されているとは言い難く、今後一層の努力と貢献が求められている。そこで、「仏教学・歴史学・考古学・地理学」という創設以来の学問領域に端緒となる課題をおきつつ、8学部15学科からなる総合大学として広く研究者の参画を求めやすく、かつ我が国の研究者にとって未解明な領域を多く含む課題を設定することで、本学の独自性と建学の精神を活かした貢献ができること考えた。ウズベキスタンは旧ソ連の経済圏に属し、かつイスラーム教を国教としているという点では日本の現代社会のありたかとは距離がある一方で、親日国であることから、今後の相互交流や研究によって得られる人脈や知識には双方に新たな可能性を期待できる。</p> <p>【自大学及び外部環境並びに社会情勢等に係る現状・課題の分析内容と研究テーマとの関連】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 仏教への世界的な再注目</li> <li>② ユーラシア研究の重要性</li> <li>③ 仏教遺跡に関する学術的意義</li> </ol> <p>【大学のブランド（独自色）として打ち出すための研究テーマとしての選択理由】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 世界的な仏教文化遺産の調査・研究を行う機関のひとつとして</li> <li>② ウズベキスタンの人材育成や調査修復技術の教育に貢献可能な教育機関として</li> <li>③ すでに実績のある事業を持続的に発展拡大させ、国際貢献する契機として</li> </ol> <p>【大学の将来ビジョン】</p> <p>本学の建学の精神は「正しきを立てて、安穏な社会、平和な世界に寄与」することにある。本学の蓄積ある学問を誠実に深めていくことで、我が国の文化や世界のなりたちの一端を解き明かし、世界の人々が希求する平和かつ文化的な交流に貢献する総合大学というイメージを定着させたい。その点ではとくに「人間・社会・地球」という研究分野をカバーする総合大学としての本学のイメージを訴求していきたい。</p>				
②2017（平成29）年度の実施目標及び実施計画	<p>今年度の主な作業は、それまでに3カ年おこなってきたカラ・テパ北丘の発掘調査の最終的なものであり、当初の発掘調査の計画としては以下のような項目を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 発掘区域の西側に建造物が存在する可能性を調査</li> <li>② 発掘箇所の実測</li> <li>③ 出土遺物及び実測図面の整理作業</li> <li>④ 保存のための応急処置</li> <li>⑤ 概報作成</li> </ol> <p>またズルマラでの作業計画としては次の項目を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>⑥ ズルマラ仏塔周辺の実測図の作製</li> </ol> <p>また、外部への発信事業として以下の3項目を設定した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>⑦ ロシア・ユーラシア地域の総合的研究雑誌「ユーラシア研究」にて特集記事掲載</li> <li>⑧ 文化遺産国際協力コンソーシアム「東アジア・中央アジア分科会」での活動報告</li> <li>⑨ ウズベキスタンの古代文化についての講演（日本ウズベキスタン・シルクロード財団）</li> </ol>				

<p>③2017（平成29）年度の事業成果</p>	<p>上記の①から⑨のうち、④をのぞく実施目標はすべて達成した。それらの成果の多くは以下の4点の刊行物に収録されている。なお、「ユーラシア研究」以外は本学の発行である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「カラ・テベ遺跡 - 2017年度調査概要報告書 -」、平成30年3月</li> <li>・「ズルマラ塔 調査・保存・整備 事業概報 - 2017年度 -」、平成30年3月</li> <li>・「ズルマラ: テルメズの仏塔 - 基礎調査報告書 -」、平成29年9月</li> <li>・「ユーラシア研究」第56号、ユーラシア研究所発行、平成29年8月</li> </ul> <p>④については現地パートナーが自国の技術でおこないたいと判断された意思を尊重した結果、当初の目的通りにはなっていないが、引き続き、保存技術の提供の申し出は続ける。</p> <p>2018年2月におこなわれた「第4次調査隊報告会」では、本学学長・齊藤昇の開会のあいさつにつづき、来賓のフェジロフ・駐日ウズベキスタン大使から、お言葉をいただくことを得た。多数の参加者が来場した場において、本事業を学長が推進し、駐日ウズベキスタン大使館との協力のもと推進していくことを示せた意義は大きい。またカラーポスターやチラシを多数作成し、国内機関・個人に送付したほか、講演会、研究会などに際しても相当数を配布した。またWebpageやFacebookなどでも随時活動報告を継続しておこなっているほか、とくに学内向けとしては、立正大学新聞に本事業に関連する活動を掲載し、その存在を周知した。</p>
<p>④2017（平成29）年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(自己点検・評価)</p> <p>調査発掘に関しては、カラ・テベ遺跡のほか、ズルマラ仏塔でも実測等の成果を上げており申し分ない。しかし、大学ブランディングという点からいえば、学内外における広報により力を入れるべきで、平成30年度はとくにそうした観点での積極的な活動の展開がのぞまれる。発掘作業の計画とその目標は適切であり、それに応じた十分な成果を出すに至った。運営体制に関しては、本事業の採択から短い間に、それなりの修正がおこなわれたことが認められるが、事業に関わる人員・教員をさらに増やしていくのがのぞましい。</p> <p>(外部評価)</p> <p>カラ・テベ遺跡及びズルマラ仏塔の研究調査は非常に有意義で、研究としての成果は十分である。また今後も「継続的な」調査がおこなわれることは高く評価できる。</p> <p>一方、ブランディングという観点からは学内外への発信力が十分といえない。様々な広告媒体・活動を通して広く一般にこの事業を周知していく必要がある。その際には、立正大学がウズベキスタンで調査活動を展開する理由をより明確にアピールすることが必要であろう。オープンキャンパス等を通じて受験生にも周知していくことや仏教系大学という特性を活かしたネットワークを活用した発信なども考慮すべきであろう。</p> <p>ウズベキスタンという国について、日本における認識は十分ではないはずである。調査結果をアカデミックに発表していくことはもちろん重要だが、大学がそうした国との関係において事業を展開していることを、より一般にも還元していく必要があるだろう。</p>
<p>⑤2017（平成29）年度の補助金の使用状況</p>	<p>研究費は主として、カラ・テベ遺跡及びズルマラ仏塔の発掘活動に使用された。遺跡では地中レーダーによる調査をおこない、そのデータを今後の活動の資料とした。また、両遺跡の調査に関する報告書を作成し、活動と成果の周知に努めた。自己点検・評価および外部評価のいずれにおいても補助金の使用については、適正と思われるとのコメントをいただいた。</p> <p>(尚、総事業経費17,463,964円のうち現地活動費は6,754,186円、活動報告関連費は2,176,556円であった。)</p>